
何時でも何処でも衝動人と幻想人

蒼惟 宙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

何時でも何処でも衝動人と幻想人

【NZコード】

N5131D

【作者名】

蒼惟 宙

【あらすじ】

仙路香美はワケあって若い叔母と2人暮らし。そんな香美の元にある日同級生の橘虹音がやつて来て居候することになった。しかし虹音は実は幽霊で・・・

第一章 これが最初

日が短くなつて、六時頃にはもう辺りは暗い。俺は家から二十分程離れたコンビニからの帰り。買ったパンやジュースが入ったビニール袋を手に下げ、電灯の無い真っ暗な道を、ぼてぼて歩いていた。高校生くらいの女子二人組みと十分ほど前にすれ違つてから、全く人は通らない。

「こんなとこ、一人じゃ歩けないよね。」

ミニスカートの女子高生が言った。

「うん。でも、あの娘一人で歩いてるよ。」

長いポニー テールの子が答えた。ミニスカートの子は少し黙つていたが、

「君イ〜！ 気をつけてね！」

急に俺の方を振り返つて手を振りながら微笑んだ。俺は驚いたが、彼女達の方を振り返り、「ありがと。」と微笑み返した。
思つた通り、彼女たちは何かひそひそ言いながら行つてしまつた。
：彼女たちが何を話していたのか分かつてゐる。良くある事だ。
でも、さつきだけは：間違えられても不快感は無かつた。むしろ、
十分前の子達を思い出して、俺は少し嬉しくなつた。まあ、誘拐されないように一応気をつけておこう。そう思つた。

あと何mかで家に着く。帰つても誰もいない冷たい俺の住処に。と、玄関のところで突然何か黒い塊が動いた。

：驚いた。泥棒？まさか。こんな所に入つても何も無いですよ。ましてや幽霊等の存在は信じていないので気にせずに足を進めた。すぐ近くまで行くと、その黒い塊は、今度は大きく「ゴソッ」と音を立てて動いた。俺は立ち止まつた。不審人物かどうか確かめたかつたが、何しろどこにも電灯が無い所だから顔も何も見えない。

「…仙路さん？」

突然黒い塊の方から、聞いたことのあるような、男か女か判別つかない澄んだ声が聞こえてきた。

俺は返事をせずに、その人を大きく避けながら玄関のドアノブを探りし、鍵を挿してドアを開けた。入ったすぐの所にあるスイッチを押すと、玄関のオレンジ色の照明が周りに広がつていった。

「お前か。」

俺から少し離れて立っていたのは、同じクラスの橘たちばなだつた。荷物らしき物は何も持っていない様子で、灰色のロングコートに淡い抹茶色のマフラーを巻いている。しかし、あまり寒がっている様には見えなかつた。不思議な奴だ。橘はいつももの様に口の両端をキュッと少し上げて俺に視線を向けていた。

俺はどうして良いのか分からなくなつて、頭の中で交通渋滞が…簡単に言えばパニックになつた。

とりあえず「上がれよ。」と言つてみた。

すると、橘は嬉しそうに眼を輝かせて、俺の後についてきた。

俺は一階の自分の部屋で橘を待たせて台所に行つた。そこでコーヒーを入れて、階段を慎重に上つた。

部屋に入ると、橘はたたんだコートとマフラーを自分の横に置き、部屋の中央に置かれた黄色の小さい丸テーブルの前に姿勢良く座つていた。俺はテーブルにコーヒーを置くと、橘の向かいに座つた。すると何故か橘は眼を見開いて、まるで奇怪な物を見ている様な顔をして、俺を見た。俺は頭かぶが?で一杯になつた。

「…コーヒーだよ。ちゃんと砂糖は入れたんだ。苦くないと思つよ。」

橘は音が聞こえてきそうな瞬きをしてから、ゆっくりと、何も絵柄の無いマグカップを見下ろした。そして手にとつて飲み始めた。半分ほどを一気に飲み、フー…と息をついた。

「ありがとう」

そう言って橘は眼を細めて微笑んだ。横から光りが射し込んできそうな笑みだ。まるで絵に描いたような子だ…と、俺は橘が視界に入

つてくる度に思う。睫毛が長くて、輪郭はスッと細くて整っている。背はそんなに高くないが、モデルみたいだと言つてもお世辞にならないすらりとした体型だ。

「おいしいね、コーヒー。」

橘の言葉で、俺は一瞬の心の旅から現実に呼び戻された。

「そお…。」

それだけ言つてから俺は自分の分のコーヒーを飲んだ。

「ごめんね、家に上げてくれたのにお礼も言わなくて。仙路さんが部屋に上げてくれて嬉しかった。ありがとう」

橘はまた一口コーヒーを飲んだ。俺はその言葉が素直に嬉しかった。なんて言えば言いのか分からぬいけど…。俺は、橘全部を見た。俺がお前を上げたのは

「…これから…」

「え？」

橘がマグカップから顔を上げた。

「外寒いから…あ」

俺は暖房がついていない事に気づき、横に転がっているリモコンのボタンを押した。と、その時、突然橘がくすくすと笑いだしたので、俺は心臓が止まりそうになるほど驚いた。

「なっ、なに？」

自分が変な事でもしたのかと、今の行動を思い返してみた。

「いや、なんか不思議な気持ちになっちゃって。そしたら急に可笑しくなったんだ。ごめん…クククツ」

橘はまた少し笑つてからハア～アと、自分を落ち着かせるようにため息をついた。

「それは良いけどさア、橘、いい加減『仙路さん』って言ひのやめてくれよ。」

俺は座り直しながら言つた。

「え…なんで？仙路さん」

「『仙』じゃないってば…『仙路君』…ってか今のははわざとだろ。」

「俺は早口で最後まで言った。橘が楽しそうに笑い、

「まあね。でも大人になつて社会に出たら、男女関係無く『さん』つてつけるよ?」と悪びれ無く言つた。

「はあ?とにかく俺は『君』が良いの!」

「ふーん。わがままなんだな。せ・ん・じ・せんつ。」

橘は俺の目の中を覗きこむようにジイーンと見ていた。

「お前なアーつ…。つたく、何しに来たんだよ?」

俺はこれ以上この話をするのが馬鹿らしくなつたので、強制的に終わらせた。すると何故か橘がきちんと座り直した。俺は思わず身構えてしまつた。今の質問はまずかつたか?それとも言い方が…

「家で父さんと母さんが喧嘩した。それで家にいるのが嫌になつて家出した。」

橘は棒読みでスラスラと言つた。聞きながら俺はコーヒーを飲み干し、頬杖をした。

「ふ~ん…」

俺は思つたままを言つた。橘は、口の両端を少し上げた表情のままで何も言わない。

家を飛び出して、行く宛てが無いからクラスメートの家に来ただそれだけの事。別に驚く事でも何でもない。俺は言葉を続けた。

「他の子のところは?」

言つてから、しまつたと思つた。こいつはあまり他の奴と話をしない。べつに苛められているとかそんなのじゃなくて、なんとなくそうなつてゐる、というような感じだ。しかし、橘はウーンと背伸びをしてから、全然気にしていない様子で改めて俺の顔を見た。

「仙路さ…仙路君じゃないと駄目な気がしたから。」

橘は言い終わつたと同時に、挾むように俺の前で手を合わせた。

「という訳で仙路君…しづら君の家に居候させてくれない?お願ひます。」

「別に手を合わせてお願いされなくても良いんだけど…

「良いよ。これから冬休みだし。好きなだけ泊まつてきなよ…俺の

部屋で良ければ。」

僕はそう言つてから立ち上がつた。橘は満面の笑みを浮かべて、「ありがとう」と言つた。

橘が風呂を使い終わつて、部屋に上がつてきた。少し青みがかつた黒いウルフカットの髪が、蛍光灯の光で光つていて奇麗だと思った。俺が貸したトレーナーは、少し橘には大きかつたようだ。

「この家のシャンプー、すっごく良い匂いだね！」

橘は人の家に泊まつた事が無いのか、さつきからずつとはしゃいでいる。丁度橘の分の布団を自分のベッドの横に敷き終わった俺は、そんな橘を見ていてなんだか楽しい気持ちになつた。こんな気持ち、なんか懐かしいな……

「あのなあ……人の家のシャンプーなんてどーでもいいだろ？ 次俺入るから、勝手に周りのモン触んなよ。いいな？」

橘は「あ～い」と返事をしながら、水色のカバーがかかつた敷布団の上で胡座をかけて辺りをキョロキョロ見回していた。

…ホントに大丈夫なのか？

「おい、入るぞ？」

俺は風呂から上がつて部屋に入る前に一応確認を取つてみた……が、返事は無い。もう寝たのか？ まだ十時くらいだけ。

構わず入ると、橘は……立つていた。

ただそれだけなら別に何とも無い。が、微動だにせず、ただ静かに、立つているだけ。

…なんなんだ？

「おい……はしゃぎ過ぎてバッテリー切れか？ それともメデューサが来たのか？ …おいつ！」

ゆっくりと、橘の顔が俺の顔に向いた。光の射さない虚ろな目が、俺を不安にさせた。

俺は橘の真正面に行き、目のすぐ前で手をブンブン振つた。すると、

ピクッと瞼が上がり、まるで真っ暗な穴でも空いたような闇色の瞳に、電気の光りが映った。

橘は初め、ここにどうして俺がいるのか理解できていない顔をしたが、すぐに納得のいった様な笑みを浮かべた。

「ああごめんごめん。なんかボーッとしてた。」

橘はハハハと呑氣に笑つた。

「それなら…良いんだけど。」

俺はホツと息をついて言つた。

「ごめんね。ありがとう。」

橘はへへっと照れくさそうに笑つた。俺は頭の中にまた?を浮かべたまま電気を消して自分のベッドに潜り込んだ。橘も、何も言わず布団に入つた。音はしなかつたが、なんとなく感じで分かる。俺は闇が広がつた天井を見つめた。

「ねえ、そういうえば仙路君、香美かみって名前だよね。どんな字?」

突然橘が喋つたので、俺はまたもや心臓が止まりそうになつた。

…聞いてどーすんだよ。

「香るに美しいだよ。」

俺はひとつ欠伸をしてから言つた。

「へえ…」

橘が感心したような声で言つた。

「じゃあ仙路君のこと、香美って呼ぶね。僕のことも二ジトで良いから。おやすみ。」

そう言つと橘は何も言わなくなつた。

…はい?

俺に拒否権は無いのか?

でも…橘の名前、虹音ヒカルって書いてにじとつて読むのか。珍しい名前だナ。そんな事を考えながら眠りについた。

第一章 僕の叔母さん

俺たちの長期休暇一日田の天気は、土砂降りとなつた。今日は外に出られない。激しく地面を打つ雨音に、俺は目が覚めた。

「ちつ、まだ5時半じゃねえか。

自分の横に置いてある、四角い何の変哲も無い黒色の時計を見て、俺はなんだか損をした気分になつてしまつた。

もう一度寝ようと布団に潜り、まだ薄暗い部屋の方を向いた。

「…虹音」

すぐ近くに、窓枠にもたれる虹音がいた。俺の部屋は、壁一面が窓になつてゐる。この家の二階の部屋の窓は、全てこつなつてゐる。虹音は開いている窓から窓枠にもたれて外を眺めている。灰色の瞳を持つが、少し翳つてゐるようと思われた。

何処を見ているんだろ?..

「おはよ。雨だね。」

虹音が俺に気がつき、じつちを向いて静かに言つた。

「…だな。」

俺は身体を起こして、ベッドの端に腰掛けた。虹音が横にちょこんと座つた

「虹音つてよんでもくれた!」

そう言いながら、嬉しそうに笑つた虹音の寝癖のついた髪が、窓から入りこんだ冷たい風に、フワッと揺れた。

「…触りたい。」

俺は、その衝動を振り払つた。

「雨の音を聞くと、弟を思い出すよ。」

虹音の翳つた眼が、俺の眼をしっかりと捕らえて離さなかつた。

「弟が…いるのか?」

おどろきだ。

虹音はフフツと寂しそうに微笑んで、俺から視線を外した。

「空音そらねっていうんだ。…行方不明だけど？」

「？」

「僕が十一歳の時に、突然いなくなつたんだ。どうしてか分からな
いけど…。」

「…それで？」

「一日中搜したけど、見つからなかつたんだ。僕は家で無事を祈る
しかなかつた。」

それから何日かして、雨が降つたんだ。僕は自分の部屋にいて、もう一度探しに行こうか考へてた。でも、空音は自分から帰つてきた。
僕にだけ会つて、親には会いたがらなかつた。「雨が降つたら帰つ
てくるから」とて言つて、また出ていつた。それからは、雨が降る
と戻つてきた。野宿もしてたのかな。僕らはその事を一人だけの
秘密にして、いつも楽しみにしてたんだ。けど、三年ぐらい経つた
頃から、空音はぱつたり来なくなつた。今、どこにいるのか分から
ない…。」

ハアーとため息をつくと、もう一度俺の方を見て微笑んだ。

「「めんね、こんな面白くもない話。あ～っ！なんか背中痛くなつ
ちゃつたつ。」

虹音はそう言つて立ち上がつた。そして、布団をたたみ始めた虹音
を、俺はずつとベッドの端に座つて見ていた。

「ういー昼かーつ。なんかダルいイー。」

虹音は首をボキッボキッと鳴らしながら言つた。

俺たちはする事も無いので、トランプをしていた。ちつとも面白く
ないのだけど…

「ねえ～他に何か無いの〜？」

「ゲームの類は持つてないんだ。家はテレビも無いしね。あしか
ず。」

俺は足を伸ばしてベッドにもたれ掛かつた。
と、下でガタガタと、何か落ちる音がした。はじめは泥棒かと思つ

たが、すぐに違うと分かった。あの音は…

「ね…今の音なに？」

虹音が飛び起きて、俺の耳元でコソコソと言った。

「多分、伯母さんが帰ってきたんだろ。」

「…オバサン?」

「虹音、ちょっと隠れてろ」

俺は首を傾げる虹音に囁き返すと、クローゼットを指差した。服が数枚入っているだけだから、小柄な虹音なら隠れられるだろう。虹音は更に首を傾げながらも、クローゼットに入つて引き戸を閉めた。俺はトランプをまとめて、黄色いミニーテーブルの下に置いた。あの人気が虹音を見つけたら、少し大変な事になるだろう…。

俺は直感した。

ダンダンダン…という音が聞こえたかと思うと、潰れてしまうのではないかと思うくらいものすごい勢いでドアが開いた。

そこには、淡いピンクのワンピースに、白のカーディガンを羽織つている女性が立っていた。腰まであるキャラメルブラウンのストレートが、少し乱れている。化粧もしていない様だ。

「香美！ここにいたのね？私…私…」

オバサンと呼ぶには若すぎる僕の叔母さんの両目から、涙が零れた。叔母さん…俺は天子姉さんと呼ぶのだが、彼女は部屋に入つてきて、俺の目の前で止まつた。

「香美、私また…。」

天子姉さんはそう言つと、いきなり俺に抱きついてきた。

俺はいつもの事ながら、「しあうがないなあ」と思う。彼女が男の人に捨てられるのは常なのだ。でも、天子姉さんは、正直に言つてもかなり美人だと思う。みんなも彼女の事を奇麗だと言つてゐる。なのに何故捨なのだろう？俺にはよく分からぬ。

「天子姉さん、泣かないで。」

俺はいつも台詞を言った。天子姉さんは俺より五cmほど背が低いので、彼女の天使の輪がかかつてゐる頭を見下ろす。俺はその頭

を、いつものように撫でた。濡れていないとこをみると、ちゃんと傘はさして来たみたいだ。変なところできつちりしている人だと思つ。

「うん…」めん。でも悲しいのよ。」

そう言いながら顔を上げた。

「香美は…男の子にモテるのかしら?」

「へ?」

俺はなぜ今そういう話になるのか分からなかつた。

「あのさ、姉さん。何度も言つけど俺は男なんだ。」

俺は頭を撫でるのを止めた。天子姉さんは、やつと俺から離れてくれた。そして涙を拭うと、また俺を見た。

「髪の毛の赤色も、細くて長い眉も、灰色で切れ長の目も…蝶乃に似てゐるわ。あの人は、いつたいどこに行つたのかしらね。」

フフフと笑つて、天子姉さんは俺を上田遣いでジッと見ついている。なんだか面倒になつてきた。

「姉さん…蝶乃はもういないんだよ」

俺は小さな子供に言い聞かせるように優しく言つた(たぶん)。天子姉さんはしばらく切なそうに俺をみると、スッと立ち上がりつてドアの方に向かつた。俺は、小さくて薄い姉さんの後ろ姿をみている。

「ごめんね、いつも。困るよね。私、バカだね。」

天子姉さんは「アリガト」と言つと、静かに部屋を出て行き、階下に降りていつた。

「なーんかキレーな人だねえ。あれが香美の叔母さん?」

俺の後ろに、虹音が立つていた。

「なつ、いつからそこに?」

こいつが来てから、俺の寿命はかなり縮まつたと思う。

「ま、いーんじゃない? 気づかれなかつたんだし。それより、香美つたらクサイ台詞言つちゃつてさあ。」

そう言つてさつきの僕の「姉さん、泣かないでよ。」を、少し大げさな動作を付けて真似した。俺は、思わず赤面してしまつた。

それを虹音は見逃さず、悪戯っぽく笑った。

第三章 風のよひな

花屋に来ると、何故かいつも田畠がする。匂いのせいだらうか……？
「みてみて！これとかキレーじゃない？」

虹音は赤いバラの花束を指差して言った。

「どーだろ…。イオリさんのイメージじゃないかなあ。」

俺の答えは、さつきから少し雑になつてきいていた。虹音はそんな俺の様子には全く気がついていない様子で、色々な花を楽しそうに見ていた。

しかし…相変わらず客が少ない。この店のおばあさんは、奥に引っ込んでいるようで、今は俺たちだけ、という状況。

家の近所にある商店街の花屋は、もともと客入りが極端に少ない冬という事もあるし、この商店街はいつもほとんど人がいないので仕方ない。クリスマスの飾り付けも、なんだか空しい。

…といった話を、ここに来る道中虹音にしていた。ここに来るのは初めてだと書いて、虹音はまたはしゃいでいた。

「ねえ、そのイオリさんってどんな人？」

虹音はずり落ちてきたマフラーを巻き直しながら言った。

「えーと…姉さんの話では、バレーをやつてるらしいよ。」

俺はタベ、姉さんから聞いた情報を思い出しながら言った。

「バレーって、バレーボール？」

「…踊る方」

今度は頭痛がしてきた。ヤバい。回答がますますシンプルになつていいく。

「へえー、すごいね！イオリなんて名前だし、きっと美人なんだろうなあ。オバさんの友達だつたら、香美も会つたコトあるんじゃない？」

虹音はもう花たちを見飽きたらしく、近くに置いてあつたパイプ椅子に（勝手に）座つた。

「違つ。彼氏。」

ああ、俺も座りたい…。

虹音は驚いた顔をして、俺を見た。

「ええっ？お、男の人？！てっきり女人の人かと思つたよ。」
ズリズリと椅子を引きずりながら、青い小さな花をたくさん付けた、細長くて頬りなさそうな花束が入つていてるバケツの前に移動した。
俺は早く外に出たくて、店先に出た。天子姉さんの用事を済ませる気力も、だんだん薄れてきた。（正直に言うと最初からあまり無かつたのだが、どうしてもと願われては、一いちらもウンとしか返事のしようが無い…）

「ねえねえ結局どーすんの？早く決めないと、オバサンの約束の時間に遅れちゃう！」

この寒いのに、こいつはよく口が回る。つたく、人の氣も知らないで…。

その時、スゥーッと風が吹きこんだ。俺は目を閉じて、火照つてきただ顔に、ひんやりしたその心地良さを感じた。そしてゆっくり目を開けた。商店街の方、日が暮れて赤く染まつていてる道路に出る方を見た。

「…え」

自分がとうとう熱で幻を見てしまつたのだと思つた。いや、そうであつて欲しい。

「じゃーこの花を」

虹音の意見を、俺は最後まで聞いていなかつた。考えるより先に、身体が動いていた。

まさか…！

俺は誰もいないオレンジ色に照らし出された、空しい飾り付けがされた商店街の道を、ただひたすらに、頭痛がすることも忘れて走つた。

ようやくブレーキがかかったその場所は、商店街から五分ほど離れ

た河原にだつた。

こここの川はあまり汚れていない、結構キレイな川だ。長い長いこの川に沿う河原には芝生が生えていて、近所の子供たちは、ここで遊ぶ。

その河原に、俺の目的はいた。

俺は、芝生の土手の上を、転ばないように慎重におりた。そして、ゆっくり近づいていく。水色の車体の自転車の隣に立つて夕焼けを眺めているその人は、俺がすぐ側まで行つてやつと気がついた。その瞬間に、その人の硝子細工みたいな瞳を持つ懐かしい目が見開かれた。

「…香美？」

良く通る、ハスキーな声だ。

「香美なのか？…ホントに？！」

俺は彼の顔をしつかりとみて、頷いた。

「十一年ぶりだな、吾末。あみまさかこの町にいるなんて思わなかつた…よ。

「ほんとに…香美なんだ。この町にいたんだ…。」

吾末が、夢でもみているように咳いた。

「元気そうだな。しばらくいるのか？」

「え…あ、うん。そのつもり。」

自転車に跨った吾末が、はにかむ様に笑つた。俺は、恥かしがり屋の吾末が、よく他人前でこうやって笑つっていたのを思い出した。

「じゃ、あの…バイバイ。」

「え、もう行くのか？」

「うん。」

吾末はまたぎこちなく微笑んでから、走り去つた。後を追いかけるように、冬の風が激しく吹き抜けていった。
何だったんだろう、今の数分間は。

近所が賑やかになってきた今日この頃。俺の家は静かだった。

虹音と過ごしたクリスマス一日間は、あつという間だった。イヴの日は、一人でコンビニで買ったチョコレートケーキを食べ、俺のお気に入りの曲ばかり入ったCDを、暗くした俺の部屋で聴いて過ごした。虹音もこの日は静かにしていた。

「クリスマスに風邪だなんて、ついてないね。」

虹音は、満面の笑みを浮かべながら、残念そうな声でそう言った。

「人の不幸を笑うなんて、お前ろくな人間になんねーな、将来。」

俺はささやかな復讐をしたが、虹音は同じ笑顔で「そーだね」と言った。

「ノヤロ～…

しかし次の日には風邪も治り、一人で家の中でトランプをしたり、例の商店街で買い物をしたりした（一応お正月の飾りつけはしてあつた）。

夕食を食べていると、雪が降ってきた。

「うおー！ 雪だ！」

虹音は窓を開け放した。俺は、あまりの寒さに掛け布団をベッドから引きずり降ろして、マントみたいに身体に巻きつけた。

「さつきからやけに寒いと思ったら…。おい、閉めとけよ。」

コーヒーの入ったマグカップの温かさをありがたく思いながら、原因不明で壊れたストーブを恨んだ。

あれから降つたり止んだりとあいまいな雪は、大晦日の今日、とうとう足首の高さにまで積もった。雲の隙間から顔を覗かせた太陽が、キラキラと雪を輝かせる。雪がその光を反射するので、眩しくてまともに外を見ることができない。

夜、俺は特にすることも無く、ベッドの上で大の字になっていた。

「香美つて、年賀状書かないんだね。」

いつのまにか側に立つて、俺を覗き込んでいた虹音が言った。黒のタンクトップの上に、襟の広く開いた無地の白いセーターを着て、色褪せたジーパンを履いている。本当にこいつの体は細い。もし田人がこいつの体を軽く握つたら、ペショつて潰れてしまふんじゃないだろ？

「送る相手がいないんでね。そーゆーお前は？書かないのか。」

よつこいしょと起き上がりぼう気に言つてしまつた。素早く俺の横に、虹音が同じように座る。

「…なんでお前はいつも俺の横に来るんだよ。」

俺は眠たくて、思わずぶつきらばうに言つてしまつた。しかし虹音は気にしていない様子だ。

「香美の隣にいるのがスキだから。」

さらつと、特に恥かしがりもせずに虹音が言つた。…聞いてる？ ちが恥かしくなる。

どうしてそういうコトが言えるんだよ、お前は…。

「香美さ、一回学校で事件に巻き込まれたことがあるよね。」

何分かの沈黙があつた後、虹音は思いついたように言つた。

「ああ、そんな事もあつたかな。」

虹音の突然の思い出話が、俺の記憶の中から十月のあの日を引っ張り出した。

「それがどーかしたか？」

「あの時さ、香美が本井と佐々木を説得したじゃない？」

虹音の目が、あの雨の日と同じように、どこか遠くを眺めていた。

「ああ、そお…だつたかな。それが？」

俺はそんな虹音の横顔を眺めた。あの雨の日と同じように

「香美つてさ、あんな奇麗事言つてたけど、本当はそんな風に思つてないんじやない？」

虹音が俺を見た。

「…え？」

俺も虹音を見た。

俺達は長い間お互いを見合つたままの姿勢で、動かなかつた。正確に言ひと、俺は『動けなかつた』。

「どうこうことだよ。」

聞き間違い…だよな？

俺はそう質問するように言つた。

「僕、香美が本当に正義感だけで動いたのかなつて、ずっと思つてたんだ。でも、違うよね。香美さ、本当は佐々木のことが好きだつたんじゃないの？佐々木は俺が守る！みたいな？アハハツ、かつこ

い」

「やめりつ…！」

俺は喉が痛くなつてしまつほどの大声で叫んだ。俺の声の後に、キーンという音が部屋を支配した。やめろ…やめり…

「お前、どうしたんだよ。どうして急にそんなこと言つんだよ！」

俺は、気がつくとベッドから立ち上がりつて、虹音を見下ろしていた。声が震えている。しかし、今は必死で抑える。虹音はそんな俺を、あの大きな黒い瞳の目で見つめていた。

「別にイミはないよ。ずっと思つてたことを言つただけ。バカだね、香美。」

感情のこもつていらない声で、虹音はそう言つた。

何なんだ？どうしてこういう事になつてるんだ？！分からないよ！

俺は、虹音を部屋に残し表に飛び出した。そして、人を搔き分けてあの場所に向かつた。途中、除夜の鐘が鳴り響いた。最悪の年明けだ。

第五章 想い出

俺はどうも国語が苦手だ。数学も苦手だが、どちらかと言つと国語。特に漢文と古典がある田の俺の精神的疲労は、大変なものだ。

その国語の授業がようやつと終わり、十分間の休憩。後一限で今日は終了だ。明日は休みだし、ゆっくりくつろげる。

俺は次の授業の用意をして、窓の外を見た。グラウンドで体育の準備をしている先生と、それを手伝わされている何人かの生徒が見えた。グラウンドを囲むように植えられている紅葉した木の葉が、大量に舞つていて。掃除が大変そうだ。

俺は秋晴れの空を見上げた。細く開けた窓から涼しい風が、金木犀の香りと一緒に流れ込んでくる。

窓側の前から三番目の席は、快適だな。

その時突然、横で落雷でも起きたのかと思つような凄まじい音がした。女子の悲鳴が教室を埋め尽くした。俺はこの黄色い声が嫌いだ。つてか何事だ？人がリラックスしているというのに…。

「何がうるさいだッ。調子乗んなよ！」

音の発生源は、俺の隣の隣だつた。机が幾つか倒れ、プリントやノートがクリーム色の床に散らばつていた。

叫んでいるのはいつも教室で騒いでいる本井だつた。よく手下みたいなのを引き連れて歩いている。怒鳴られているのは、ウチのクラスで成績の良い佐々木だ。前から彼女は、本井たちに苛めらしきものを受けっていたようだが、俺は女子の行動に興味はない。佐々木は机のなくなつた空間に一人立つていた。

「カワイイくもないせにっ。」

本井の手下の一人、能登も口を出した。

「あなたたち、そうやって大声出すことしか出来ないの？バカみたい。」

佐々木が彼女たちを睨みつけた。

「他の子だつてそう思つてる。それから、あなたたち何かと理由をつけて私や他の人を苛めてるけど、結局そういう行為は、低レベルで無意味だよ。」

泣きもせずに、佐々木は落ち着いた口調で一気に言った。

俺は、後ろの席に座つて、事の成り行きをじつと見ている生徒をつけた。面白くなさそうな顔で、頬杖をしている。

「良い子ぶりやがつて！ ムカツクんだよつ、そーゆーの！」

本井は言い返されたのが悔しいのか、顔を真っ赤にしていた。そして、佐々木の筆箱をわしづむと、床に叩き付けた。バラバラと音をたてて中身が飛び散つた。俺はその中にカッターナイフを見つけた。0・何秒の速さで、悪い予感が全神経を駆け巡る。周りがざわざわとしている。野次馬も集まつていた。

「何か言い返してみなよ。バカでもそれくらいできるでしょ？」

佐々木はさらに本井を挑発するような事を言つた。その瞬間に、本井はそのカッターの拾い、刃を力チ力チと出した。

「だまれーつ！」

振り上げられたカッターの刃は、真っ直ぐ佐々木に向かつていった。再度教室に、野次馬のも含めた悲鳴の嵐が巻き起こつた。佐々木が固く目を瞑つたのが見えた。

…これをまさに間一髪というのだろう。カッターの刃は、佐々木に傷をつけることは出来なかつた。

「！？」

教室と外野が、一斉に沈黙した。

「せん…じ？」

本井の体がブルブルと震えている。制服のブラウスに鮮血が飛び散つていた。カッターから滴つた血が、床に血溜りを創る。

「せ、仙路さんツ、頬が！」

背後から、佐々木が悲鳴に近い声で叫んだ。そのとたん、また周りが騒がしくなつた。どこから誰かが先生を呼びに行つてくると言つてしているのが聞こえた。

…遅いよ。

俺はそう思いながら、傷の少し下を触った。ビキビキと鋭い痛みが、体の神経を刺激する。手についた血は、あまりキレイとは言えない色だ。思つたより深く切れているようだ。血液が次々と流れる。あれ、前にもこんな事あつた…。俺はハンカチできつく傷口を抑え、止血した。

「わ、私、そ、そんなつもりじゃ…」

本井が力無くそう言つた。その言葉に俺は反応した。本井は、俺が睨むと、蒼白な顔で後退つた。

「そんなつもりじゃなかつた？じゃあどういうつもりでカッター拾つたんだよ。俺の頬が切れてるってことは、もしあのままだつたら、身長から考えて佐々木の片目が無くなつてることになるんだぞ。」俺は本井の手からカッターを抜き取り、刃を納めた。

「ど、どうしよう。血が、血が…」

「自分で責任を持てないことなら、最初つからするなよ。感情に任せて動くなんて、誰でもできるんだ。佐々木も」

俺は振り返つた。彼女の両目に涙が溜まつている。

「言い方、少しきつかつたんじやないか？お前、こいつらを見下してた様に見えたぞ。俺は偉うこと言えないけど、そーゆーの、良くないと思うんだ。」

俺は彼女を傷つけない様に、慎重に言葉を選び、言つた。

「…そうね。私、良くなかった。ごめんなさい。」

佐々木は素直に頭を下げて謝つた。本井も、しばらくしてから、恥かしそうに頭を下げる。

その時、俺の中である記憶が鮮明に思い出された。体が、自分でコントロールが効かないくらいに震えている。堪らずに、教室を飛び出した。後ろの方に、ざわめきが流れていった。

屋上に上る階段の途中に、俺は頭を抱えて座り込んでいた。出血はだいぶ治まつてきたが、震えは止まらなかつた。どうして今、こう

んなこと思い出すのだろう。父さんが俺と吾末を包丁で斬りつけたこと。母さんがすぐに近所の交番に駆け込まなかつたら、俺達は死ぬところだつた。

父さんはそれまで対人関係等でストレスをため込んでいたから、会社をクビにされたあの日、酔っ払つて遂に理性を失つてしまつた。俺達は病院に運ばれて何日か入院した。父さんは逮捕され、母さんは離婚届を出した。俺達の家族は、バラバラに崩れてしまった。モトモトコウナル運命ダッタノカモシレナイ…

「仙路さん。」

突然の呼びかけに顔を上げると、目の前に誰かがしゃがみ込んで俺の顔を覗きこんでいた。

「大丈夫か？」

その人は特に優しい言い方をするわけでも、微笑んだりするわけでもなく、無表情で俺に話しかけてきた。

「なんだ、橘か。」

橘は俺の隣に座り、俺を見ずに、どこか遠くを眺めるような目をした。

「どうしてここに？」

俺の質問に、橘は調子を変えず、静かに言った。

「なんとなく。」

…こいつは俺にケンカを売つてるのか。

「そんなんぢやないよ。なんとなく心配でつて意味さ。」

橘が俺を見た。俺は非科学的な事は信用しない方なのだが、この時ばかりは超能力とか、テレパシーを信じた。俺の顔を見るその目は、踊り場の窓から射し込む光でとても素敵な色をしていた。ワインカラーチカ。

「教室、先生が何人も来て、本井と佐々木を連行していった。」「れ、連行？」

「授業は自習になつたんだ。だから僕ここに来た。」

橘はまた前方を向いて、「仙路さん、本当は刃物恐怖症なんぢや

ないの？」と言つた。俺は頭が混乱した。

「どうして…知ってるんだ？」

「分かるんだ、見ると。君が佐々木の前に立つた時、顔が真っ青だつた。汗もすごかつたしね。そうなんだろうなあって思った。」橘のその何でもない言葉で、どうしてか分からぬが、気がつけば俺は今までのこと、全てを打ち明けていた。

父さんが、昔はそうじやなかつたのに、だんだん乱暴になつていつたこと、母さんと離婚の事でもめていたこと。遂に俺と吾末にまで手を出してきたこと。会社を首にされて自棄になつた父さんが、俺達を包丁で斬りつけたこと。それで逮捕されたこと。母さんが俺を捨てて、吾末を連れて家出したこと。それがとても悲しかつたこと…橘はそれを、何も言わずに俺の顔を見て最後までちゃんと聞いてくれた。俺は我に返つた。あれ？

「なんで俺こんなこと…。お前には関係ないのに。」

笑つてみたが、全然可笑しくなかつた。橘はそんな俺をじつと見た。「そうだね、関係ない。でも、仙路さん今も辛いんでしょ？わか」「分からぬいよ！」

俺は立ち上がり、橘を睨みつけた。心臓が激しく鼓動している。息が荒くなる。

「何でもかんでも分かるわけないだろ！今の俺の話だけで、お前に何が分かるんだよ？！辛いつて？そりやそれしか言いようがないよなあ！同情なんて要らない！悲しくなんかない」

こんなに大声で叫んだのは、生れて初めてかもしれない。喉がジリジリと熱くなる。肩で息をする。

「辛いから、泣いてるんじゃないの？」

不思議そうに俺を見ながら、橘が言つた。泣いてる？俺が？

「いてッ！」

傷口に、何かが染みて痛い。ホントだ…泣いてる。

それから、俺は橘の隣で泣いた。本来なら数学の授業だったはずの七限目のチャイムが鳴り終わるまで。

第六章 母の入院

夕方、玄関の鍵を開けて、俺は廊下の電気を点けた。汚い。部屋に行こうとリビングを通過している途中、ソファーの方から「ゴソゴソ」と音がした。電気を点けると、天子姉さんが膝を抱えて座っていた。ソファーの前の机上に置かれていた炭酸ジュースの缶を、ぼーっと見ている。長い睫毛で、顔に影ができていた。

「姉さん、今日は衣麻莉さんのところに泊まるんじやなかつたの？」俺はジャンパーのまま天子姉さんの隣に腰掛けた。姉さんの小さな肩がビクッと動いて、整つた顔がゆっくり僕を見た。

「これから行くのよ。あ、この前はお花ありがとね。」

少しこもつた声で姉さんは言つた。俺は、何の事を言つているのか分からなかつたが、すぐに吾末に会つた日の事だと思い出した。

「花…つて？」

俺は確かに花屋を飛び出して、そのまま家に帰つたはずだ。帰つたら部屋に虹音が座りこんでいた。俺は、当然だが、とても怒られた。

「どこ行つてたの」とか、「急にいなくなつて心配したんだから」とか色々言われたが、花の事については何も言わなかつたので、完璧に忘れていた。

「香美、可愛い藍色と白色の花が付いた小さな花束を、玄関の靴箱の上に置いてくれてたじやない。衣麻莉さん、とても喜んでたわ。」

天子姉さんは二ツ「リと優しく笑つた。

どういふことだ？…虹音か？

「俺は、知らない…」

俺は本当の事を言つた。姉さんは怪訝な顔をしてから、「そつなの？」じゃ、やつぱりあれは…。」声を低くして言つた。

「私あの日、もうすぐ香美が帰つてくる頃だらうと思つて、リビングと廊下の境目に立つてたの。そしたらドアが開く音がして、私、

すぐドアのとこ見たんだけど誰もいなくて…。でも、靴箱の上に花束が置いてあつたのよ。今思つと、ちょっと怖いわ。

天子姉さんはそう言つと、自分の肩を抱いた。おかしい。俺は帰つた時、姉さんの出ていくところを見たはず。じゃあ虹音はどうやって…

「じゃ、行つてくる。」

姉さんは不意に立ち上がり、旅行鞄を背負つて玄関に向かつた。大晦日のあの日、俺は家に帰りづらくなつて野宿という、極端な行動をとつた。そして一月一日の昼頃、家に帰ると誰もいなかつた。部屋に行つてみたけれど、窓が開いているだけで、虹音はどこにもいなかつた。捜そうかと思ったが、あの時の事が蘇ってきて腹が立つたのでやめた。どうしてあいつはあんな事を言い出したんだろう。

俺が何か…

ピンポン

考え方をしていたせいで、インター ホンの音がものすごく大きく聞こえ、俺は飛び上がつた。

「はい。」

俺はまだ心臓をドキドキさせたまま、ドアを開けた。そこには吾末が立つていた。息が荒い。家の前に水色の自転車が止めてあつた。「母さんが仕事先で倒れちゃつた。さつき病院に運ばれたつて。どうしよう。私、どうしたら良いのか分からなくて…」

吾末は早口で喋つた。

「落ち着け。わかつた、俺も一緒にその病院に行くから。何か持つていいくのか?」

俺は吾末の目をジッと見た。

「一応言われた物は入れてきた。」

少し落ち着いた様子で、吾末は自転車の籠を指をして言つた。

「よし、すぐに行こつ。」

この突然の出来事は、虹音の事を上塗りして消してしまつた。

『仙路心』の名札が付いた部屋の引き戸を開ける時、俺は少し緊張

していた。中に入ると、ベッドの周りには、白いカーテンがかかっている。吾末が片手でカーテンを開き、入つていった。

「母さん、具合はどう?」

中から、吾末の心配そうな声が聞こえてくる。

「もう大丈夫よ。ちょっと疲れが溜まっていたのね。心配かけてごめんね。」

続いてその声が聞こえた瞬間、俺の心臓は息苦しくなるほど強く鼓動した。若い女の子の様な、しかし落ちついている懐かしい声…と、カーテンの隙間から吾末の細い腕が突き出て、俺を手招きしていた。俺は少し戸惑つたが、思いきって入つた。

「? !」

横になつているものだとばかり思い込んでいた俺は、壁に寄りかかつて上半身を起こしている母さんと、バツチリ目が合つてしまつた。

「そんな…本当に…」

母さんは俺の姿を見て激しく動搖した。

俺の母さんという人は、少しも変わっていなかつた。

「母さん、十年ぶりだね。」

俺は心に浮かんだ言葉達を全て無視して、できるだけ穏やかにそう言つた。

「香美!会いたかった。」

母さんの頬を、涙がつたつた。

「会いた…かつた? 俺を捨てた当の本人がよくそんなこと言えるな。

」

できるだけ自分を抑えるように努力した。それなのに、母さんの言葉が俺の中のスイッチを押してしまつた。

「違うの、私は…」

母さんが口に手を充てる。吾末が不安そうに俺を見る。

「違う? 母さんは俺が寝てる間に、俺を置き去りにしたんだ。朝起きた時、家の中には誰もいなかつた。俺がどれだけ不安になつたか…どれだけ心細くなつたか分かるか? 家中搜しても、誰もいなくて、

怖くて……」

その時の感覚がリアルに蘇り、俺の体は震えた。

「たった六歳の子によくもあんな事できたな。悲しかった…ショックで息ができなかつたよ。母さんは、俺と吾末じゃなく、吾末だけを連れていったんだ！どうして？どうしてなんだよ？！」

感情が溢れる。リピートボタンが押されたように、何度も頭の中で言葉を繰り返す。この部屋に今俺達だけで、他の病室と離れていたかつたらきっと今こり誰かが飛んできただろう。体が熱くなるのを感じた。今すぐ田の前でおろおろするこの女と、俺を不安げに見ている妹を殴りたい衝動にかられた。

「香美、？」

吾末が俺を見て、憐れむような田線を向けた。

「母さんは香美を捨てたんじゃないよ。香美は誘拐されたんだ。」

吾末が悔しそうに言った。

瞬間、俺の全てが、止ってしまった。

第七章 本当は・・・

「どうして俺はここへ来てしまったんだろう。どうして俺はここにいるんだろ?...」

何も分からなくなってしまった。

「ゆーかい? 何だよ… それ。嘘なんかつくたって、今ここで暴れたりしないよ。」

俺は自分で驚くほど冷たい声で言つた。怒りを通り越してしまつた。聞く氣にもなれない。

「ちがうよ、本当に誘拐されたんだ。十年前に、天子ねえさんが」「え?」

今なんて…

「天子姉さんだよ! あの人があの人が香美を誘拐したんだ!」

ホントに覚えてないの? 吾末が俺に迫る。

「警察に搜してもらつたけど、いなくて、もうダメかもって言われたんだ。でも、私と母さんは犯人を知つてた。姉さんは、結婚まで約束してた人にフラれたんだ。だから、その恋人の子供を… 香美を誘拐したんだよ!」

吾末の語気が、後半になるほど荒くなつていった。

「どうして、俺だけを?」

ショックで真っ白になつた頭に浮かんできたこの質問を、俺は無意識のうちに口にしていた。吾末はチラッと母さんのほうを見てから、また俺に向き直つた。母さんは、声も出さずに涙を流している。

「それは… 香美が父さんにそつくりだからだよ。」

これで分かるだろ? 吾末の心の悲鳴が聞こえた。

もうこれ以上こんなこと言いたくないんだよ、香美。

「でも、でも姉さんは父さんの妹じゃないか。父さんとは結婚できないはずだろ?」

俺は聞こえないフリをして、訊いた。

「養子…なんだよ。父さんが姉さんをつた一年後に、姉さんの御両親が事故で亡くなつたんだ。身寄りがないからつて、罪悪感を持つていた父さんが、おじいちゃん達に頼んで養子にしてもうつたんだつて。その時にはもう、母さんと結婚してたんだけど。」

そつ言ひつと吾末が俺の後ろにある窓を開け、外を見た。晴れ渡つた空に、何羽か鳥が、気持ち良さそうに飛んでいる。強い北風が吹き込んで、部屋を満たした。

この風が、今ここで吾末が話した事実を全部かき消して、否定してくれればいいのに…。

俺は本気でそう思った。

「帰るよ…。」

俺は銀のドアノブが付いたドアだけを見て、進んでいった。吾末は何も言わなかつた。母さんは、ベッドに横になつている。

病院の外に出た。最初に来た時と少しも変わっていないはずなのに、俺はこの何十分かで、何十年も過ぎてしまつたように感じた。疲れてしまつた。

家に帰りつゝと、俺は部屋に戻つて、何も食べずにベッドに入つた。そのまま夢も見ずに、朝まで眠つた。

台所のカウンターで朝ご飯を食べていると、姉さんが帰つてきた。

「ただいま。」

姉さんは爽やかに言ひて、微笑んだ。その顔は、俺に昨日の事を思い出させ、そして全て嘘だと思わせた。

天子姉さんだよ！あの人ガ、香美を誘拐したんだ！

吾末の言葉が、聞こえてきたよつな気がした。

「どうしたの？ボーッとしちゃつて。」

姉さんは何時の間にか俺の前に回りこんで、心配そうな顔で俺を見ていた。

「いや、なんでも。おかげり。」

俺は一語一語を自分で確かめる様にして、そう言つた。姉さんが「

それなら良いや」と言つて、リビングに荷物を置きに行つた。

俺は「階に上がり、部屋のドアを開けた。

「おはよ。」

「うおッ……」

俺は思いきりバックして、壁に頭をぶつけた。

「い…つて…！あれ、夢のはずなのに痛いぞ？」

「あ～あ、今ので夢と現実の区別もつかなくなっちゃった。」

俺はようようと、部屋の中に入つた。ベッドもグチャグチャのままで、床の上には何冊かの本が散らばつてゐる。黄色のミニテーブルとクローゼットがあるだけの、質素な俺の部屋。そんな部屋にある、開け放たれたあの大きな窓の窓枠に座つてゐるのは、紛れもなく…

「虹音。」

サワサワと揺れる、柔らかそうなウルフカットの髪、雪みたいに白い肌、大きな丸い目に、長い睫毛が相変わらず影を作つてゐる。持てば壊れてしまいそうな、細い線の体。

本当に、虹音だ…。

安心すると同時に、俺はベッドに座つて息をついた。

「どこ…行つてたんだよ。家に帰つてたのか？」

虹音を見ると、目が合つて思わず逸らしてしまつた。緊張している自分が可笑しかつた。

「家には帰つてないよ。」

虹音が、まるで悪い事でもしたような声で言つた。

「帰つてない？

「俺は不審に思つた。しかし俺がその先を聞こうとするとい、虹音がさせまいと先に口を開いた。

「この前は『めん、あんな事言つて。』

「ああ…もう氣にしてないよ。」

俺は素直な気持ちを言つた。虹音には、素直な自分が出る。「僕、香美に嫌われようと思つたんだ。もう、会えなくなっちゃうかもしれないから…。」

久しぶりに聞く虹音の涼しい声が、心地よく耳に流れてくる。しかし、しばらく今の言葉を繰り返してみると、とんでもない事だと気がついた。

「どうして。」

俺の声には、何も無かつた。薄っぺらい、ただ聞こえるだけの音。

「香美、本当の事を話すよ。」

虹音が言った。

「本当の事?」

俺は足を組んで座り、壁に背中をおいた。昨日も本当の事を聞いたばかりなのに、また『本当の事』を聞かなければならないのか。

「香美…信じてくれないかもしけないけど、ちゃんと聞いて欲しい。僕は、本当はここに存在してないんだ。」

「…。」

虹音の、朝日でキラキラしている両目を、俺はしつかりと見た。
「簡単に言えば、僕は幽霊なんだよ。香美にしか見えないんだ。だから、香美が叔母さんを慰めている時も、玄関に花を置いた時も、僕は彼女の目の前に立っていたのに、見えなかつたんだ。」

虹音が俺の隣に移動した。そういうえば、いつもこいつがベッドに座つても、シーツに皺一つできなかつたな…。どうして気がつかなかつたんだろう。俺は冷静以外の何にもなることができなかつた。もう何でも来い、だ。

「そうか。じゃあ、おじさんとおばさんが喧嘩したつてのも嘘なんだな。」

おれの思考回路は、完全に違う所に繋がってしまった。何もかもが、俺が今まで信じてこなかつた、非現実的な事だ。

「うん…。僕、父さんに一升瓶で何度も頭を殴られたんだ、香美の家に来る前の日。それを、仕事から帰ってきた母さんが見つけてくれて、救急車で運ばれた。死にかけてたんだけど、何とかもつてる。今は眠ってる状態かな。僕の魂だけが、香美の所に行っちゃつたんだね。」

フフッと虹音が微笑んだ。この顔は、吾未に少し似ている。

「僕も香美と一緒に、あんまりこいつ事信じてなかつたけど、結構素敵だね。」

俺は言葉が出なかつた。

虹音の悪戯っぽく笑つた顔が、眩しく光つていて見えたのは、きっと俺の見間違いに違ひない。」

第八章 虹音の弟

「えへっと、五〇六号室になりますね。この廊下をずっと真っ直ぐ行つていただきて、突き当たりを右に曲がつて下さい。一番奥のお部屋です。お静かにお願い致します。」

その背の高い看護婦は、説明を終えると、微笑んだ。俺は礼をしてから、言つ通りに進んだ。虹音は病院の名前を教えてくれなかつたけど、この辺で一番大きな病院といえばここしかない。虹音は確かに隣町に住んでいたから、ここに運ばれてきたはず…

突き当たりを右に曲がつて一番奥の部屋の前で、俺は少しの間じつとしていた。

『橘 虹音』

見慣れた名前のはずなのに、今初めて出会うかの様なドキドキする気持ちと、不安な気持ちが入り交じつた、微妙な感覚が有無を言わせず俺を襲つた。

「こんにちは。」

俺は小さい声で言いながら、中を覗いた。壁にある二つの窓は、全て開けられていた。ベッドの周りのカーテンは、閉められていなかつた。部屋には誰もいない。俺は遠慮がちにベッドに近づいた。あのふんわり髪の頭には、純白の包帯が巻かれている。形の整つた眉の下にあるワインカラーの瞳の目が、今は瞼に隠されている。スツと高い鼻も、描かれたような輪郭も、何もかもが懐かしかつた。白すぎる肌は、光りが当たると透けていくように見える。白雪姫みたいだ、と俺は思った。死んでいるように眠っているお姫様を、俺はずつと眺めていた。

と、その時扉が開き、誰かが入ってきた。その人は、一瞬驚いた顔をしただけで、後は無表情だつた。

『仙路 香美さん?』

その人の声は、虹音の声だつた。俺を見る目の色、眉の形、鼻の高

れ、色の白や、輪郭…虹音と寸分違わない。

「空音君。」

俺は虹音の話を思い出した。空音。虹音の弟。

「話は聞いてたけど…双子だったのか。虹音と瓜二つだな。」

俺は側にある椅子に座った。虹音の弟も、扉の近くにおいてあつた椅子を持って、ベッドの側に来た。

「よく言われる。違うのは性別だけだって。俺も、仙路さんの」とはざつと聞いてた。本当に男の子みたいだ…。」

最後の言葉を、虹音の弟は真剣に言った。

「いや、みたいじゃなくて男だし。」

俺は虹音の方を、密かに睨んだ。弟に変なこと吹き込むなよ…

「えつ、ホントに?!俺てつきりそうだと思いつこんでた。」

また俺をからかってただけか、あいつは。彼はそう言って、初めて笑つた。

虹音と同じだ…。俺はつい見とれてしまつ。

「じゃあ香美でいいな。俺も空音でいいよ。」

…こんなトコまでそつくりかよ。

「虹音さ、俺が家に帰つてくる度に、香美の話をしてたんだ。」

空音は掛け布団の上に乗つて、自分の手を重ねながら寂しそうに微笑んだ。俺は驚いた。

「そつか…」

としか言えなかつた。

「空音がね、この間病院に来てくれたんだ。雨も降つてないのに。」

虹音が嬉しそうに言つた。

「え、ああ、そうなんだ。」

虹音が幽霊だと聞かされたせいで、俺は少し放心状態になつていた。まあ幽霊でもなんでも、俺はいいんだけど…

「あの日、事件の時さ、香美話してくれたでしょ?香美の家のことが。あれ聞いててさ、僕のところと一緒にだなって思つた。」

「え…？」

「僕の父さんも会社クビになっちゃって、それまでも色々あつたんだ。だから、僕にあんな事をしたんだね。」

虹音の目がまた遠くを見ている。

「でもきっと、怖かつたんだよ、いろんな事が。僕、運ばれる時に、警察に取り押さえられてる父さんが、少し見えたんだ。父さん泣いてた。何度も何度も、「『めんな、虹音』って言うのが聞こえた。なんで謝つたんだろうね。父さんが僕のこと、本当は大切に思つてくれてる事ぐらい知つてるのに。」

虹音が俺を見た。さつきより虹音が薄くなっているような気がした。何かの歌じやないけど、このまま時が止つてしまえばいいのに…と思つ。

「香美、僕、実体の方に戻るよ。」

虹音はそう言つたとたん、フツと消えてしまった。何も言えなかつた俺は、ずっとベッドの端に座つていた。

第九章 幸せ

俺が病院から戻ると、天子姉さんはいつものようにソファーに座っていた。俺は声をかけずに、隣に座った。

「おかりり。」

姉さんが俺を見ずに言った。

「ただいま。」

俺は姉さんの奇麗な横顔を見た。今日も化粧をしていない。

「姉さん。」

俺は帰る道中、あの事を天子姉さんに聞い「つとを考えていた。

「なあに？」

俺を見た姉さんは、今始めて俺がいることに気がついたような、そんな顔をした。

「姉さんは、どうして俺を誘拐したの？」

思い切って聞いてみたものの、今でもまだ半信半疑なので、こんな事を言つていてる自分がよく分からなかつた。天子姉さんは驚きもせず、分かつていていたというように微笑んだ。

本当に、奇麗な人だ…

「知つたのね、全部。」

天子姉さんは、虹音と同じ、遠くを見るような目をした。俺は躊躇わざ頷いた。

「そうね、あなたが蝶乃兄さんに似ていたからかな。」

姉さんはキャラメルブラウンの髪をかきあげた。

「蝶乃兄さんが、結婚できないって言いに来た時は、本当に悲しかつた。今ここで死んでしまいたいと思った。「僕はもう、天子という人に、魅力を見出せなくなつてしまつたんだ。本当に好きじゃないのに、結婚なんかしたらきっと天子は幸せになれない。限界なんだ。」って兄さん言つたの。それからしばらくして、心さんと蝶乃兄さんが結婚して、香美と吾末が始めて実家に遊びに来た時…十年

前だつたかな。私は香美を見た瞬間に…壊れちゃつた。」

俺の顔をじつと見た姉さんの顔に、影が落ちた。俺はその顔にドキツとすると同時に、ゾクツとした。

「それで、香美を連れて行つちやつたの。遠くに。でも、香美は何も言わずに、いつも私について来てくれた。我に返つても、そんな香美が可愛くて可愛くてしようがなかつた。だから、あなたがあの人に似てるとか、そういうのじゃなくて、本当の自分の子供みたいに育てたわ。香美にはずっと、お母さんがあなたを捨てたんだって嘘をついてきたの。謝るだけじゃ済まないだろうけど…ごめんなさい。」

姉さんは俺の方に体を向けて正座をし、手をついた。ソファーに、ポタポタと音をたてて水滴が、何粒も落ちる。

「姉さん、泣かないで。」

俺は姉さんの肩をもつて、ゆっくりと起こした。

「…香美、いつつもそつやつて慰めてくれたよね。その少し哀しそうな、困つたような顔がますますあの人に似てて、見る度に衝動に駆られるの。ずっと私の所に縛り付けていたいって。ずっと側にいて欲しつつ…。でも、もうすぐそれも無理になるんだなあつて考えてたら、衣麻莉さんに会つたの。」

姉さんは手の甲で涙を拭つと、ニコシヒツもみみたいに優しく笑つた。

「人つて、結局同じような人を好きになつてしまつね。衣麻莉さんの写真、見せてあげる。」

姉さんはそう言つと、足元に置いてあるあの旅行バッグを開けて、中から小さなアルバムらしき物を取り出した。

「ほり、これよ。」

姉さんは何ページ目かを開くと、俺に差し出した。俺の手はその写真に釘付けになつた。

父さんだ…！」

絶対そうだと思つた。しかしそくよく見ると、ほんの少し違うとい

ろがある。姉さんと一緒に、大きなクリスマスツリーの前で、楽しそうに腕を組んで笑っている。少し癖のある茶色い髪に、細い眉。切れ長の目。よく女人の人と間違えられるのよ、と母さんが笑っていたのが、ものすごいスピードで思い出された。あの時は、みんなようく笑つてたな。

「姉さん、この人といつしょにいて…幸せ？」

俺は姉さんにアルバムを返した。

「とつても。」

姉さんの頬が、少し赤くなつた。

俺は、今までこの人に振りまわされていたことになる。ずっと。でも、もうそんな事は過去のことだ。他人は、そんな簡単に許して良いのかつて言うかもしれないし、こんな呆気ないなんてと思うかもしれないけど、何て言うか…俺は俺の中で勝手に決着をつけた。今はただ、この人の末永い幸せを祈るばかり。

俺は、相当のお人好しみたいだ。

第十章 幸福へ、始動

俺は銀のノブを握つて、白い扉を開けた。今日は窓が一つだけ開いる。その窓辺に、肩胛骨あたりまである髪を下ろして、姿勢正しくパイプ椅子に座っている母さんがいた。後ろから見ると、高校生みたいだ。

「母さん。」

俺は横に行つて、声をかけた。母さんはハッと顔を上げて、俺を見た。そしてとても嬉しそうな顔をした。

「もう…来ないと思つてた。」

母さんの声は、俺を安心させる。虹音とはまた違う心地良さがある。

「母さん、あんなこと言つて、『ごめんなさい。姉さんに直接聞いたよ。姉さんの気持ちとか、いろいろ。』

そうなのと言つて、母さんは微笑んだ。その表情には、疲れが見えていた。

「吾末は？」

俺はもう一つの椅子を持つてきて、横に置いた。

「家よ。また夕方くらいに来るんじゃないかな。」

母さんは俺の分の場所を空けてくれた。もう普通に動けるようだ。

「そお。あ、その家のことなんだけど…」

俺は、吾末と似ている母さんを見た。正確に言つと、吾末が母さんに似てゐるだけれど…ま、それは置いておこう。

「俺達と暮らさないか？」

母さんは、驚きと困惑が混じつた様な顔をした。母さんは黙つていた。俺は先を続ける。

「天子姉さんがね、一緒に暮らさないかつて。姉さん、来年の春に結婚するんだって。衣麻莉さんって人と。」

これは昨日、初めて聞かされた。俺も驚いた。衣麻莉さんは、全て知つてゐる。姉さんが話をしたからだ。それで今まで失恋していた

らしい。しかし、衣麻莉さんは全くそんな事はなく、姉さんの話の後に、「結婚してください」と言つたらしい。

俺のあの祈りは、速達で神様に届いたわけだ。

「でも、母さんの人生の一部を奪つたような人を、そんなに簡単に許せるわけ無いから、こんな申し出、図々しいかもしれないけどつて、姉さん言つてた。」

俺もこの意見は納得できる。俺が許しても、母さんが許すかどうか…。でも、俺はまたみんなで楽しく過ごしたい。昔と全く同じじゃなくても良いから、そうしたい。

「もう…ね。私は、あの人を恨みつづけてきた。」

母さんは静かに言つた。ああ…駄目か。

「でも、こうして香美を育ててくれた。私達も巡り合えた。私は、もう一生香美には会えないんだと思つていたから、こんなに早く再会できるなんて、夢にも思わなかつたわ。だから、香美を見たその時に、私の中で十年はとても短くなつちゃつた。」

母さんは微笑んで、俺の頭を優しく撫でてくれた。昔みたいに。「香美の中で整理がついているなら、私はあの人との事をもう恨んだりしないわ。吾末には、私が話すわね。」

俺は、父さんがどうして母さんを好きになつたのか、分かつたような気がした。母さんは、素敵な人だ。とても、とても。

「ありがとう。」

俺は、久しぶりに笑つた。

しばらく歩くと、一度来たことのある部屋の前に辿り着いた。橘虹音の部屋。

「こんにちは。」

中に入ると、前と同じように窓が全て開けられ、ベッドのカーテンも開けられていた。違うのは、空音が、ベッドの横に両膝をつき、虹音の眠るベッドに…ちょうど俺が教室の机の上に寝るように突っ伏しててこるところ。しかし、眠るのだったら椅子に座つてそ

うすれば良いわけで、わざわざ痛いことをしなくても良いわけだ。

という事は、この状態から見ると、何かでショックを受けて足の力が抜けて…」うなつた…？

「おい、どうした？」

俺は空音にはもちろん、他の意味も込めて彼の肩を軽く揺すつた。空音は顔を起こしたが、目の周りが赤く腫れていた。嫌な予感がする…

「虹音、ずっとこのままかもしれない。」

空音の声は、掠れていた。

「もう…なのか。」

俺は、なんとなく分っていた。虹音が、以前「もう会えなくなるかも」と言っていたからだ。

もう会えない。それは…死を意味する。

「ずっと眠つたままだからね。何も食べてないし。」

俺は空音の後ろにある椅子に腰をおろした。空音は、虹音の顔を見た。虹音は、さらに細くなっていた。肌は、白以上の白だ。

「俺は、逃げたんだ。」

空音が突然そう言った。

「逃げた…つて？」

俺は、空音と虹音を見た。同じ顔が並んでいるのは、なんだか不思議な感じがした。

「壊れしていく父さんからだよ。父さんは、昔はそんなんじゃなかつた。優しかつた。なのに、いろんな事が、父さんを変えたんだ！虹音がこんな事になつたのも、俺が家出して、虹音を一人にしたからだ！いつも一緒にいてたのに、いつからこんなにバラバラになつちやつたんだろう…みんな…」

最後の方は、ほとんど独り言のようになつていった。俺は、もう一人の俺を見ている様な気がした。なのに、何も言ってあげられない。俺たちは幸せに向かっていってるのに、虹音達は、反対方向に行かされようとしている。

ひどいよ、神様……

「虹音、死んじゃ駄目だよ。」

俺も、空音と同じようにした。そして、田の前に投げ出された冷たい手を、ぎゅっと握った。

「俺、虹音といてホントに楽しかつたんだ。まだ、おまえと仲良くなって、一週間くらいしか経っていないぞ……」

空音が、俺を見る。見開かれた目の腫れは、少しひいていた。

「俺、もっと虹音の側にいたいよ。」

素直な言葉は、虹音にしか出てこない。

「空音が、悲しむだろ？ 俺だって悲しいじゃないか。もう辛い思いなんか、させないでくれよ。俺、おまえがいないと、ダメなんだ……！」

「それ……は……愛の告白……？」

「は？！」

俺と空音は同時に言ひて、虹音の顔を、上から覗くような形で見た。薄く開いた目には、あの光るワインカラーの瞳が見えた。悪戯っぽいあの笑顔が、そこにあった。俺が握った小さい手が、弱々しく握り返してくる。

「虹音っ、気がついた！」

今、医者呼んでくるからーーそういうんで、空音は飛び出していった。

「ひさしふ……り。ざん……せ？」

静かになつた部屋に、少ししてから虹音の声が流れた。少し枯れているけど、虹音の声だ。俺の好きな音。俺は、微笑みかけた。

「元気じゃない奴に聞かれても、変な感じがするなあ。」

俺は、今びになつて嬉しそうが全身にこみ上げてきた。虹音も微笑む。

「僕……香美が……るから、やつぱり……生きよう……つて、思った。」

虹音の手の力が、少し抜けた。ずっと動いていなかつたせいで、なかなか力が入らないのだろう。

「そつか。俺も、虹音がいてくれて、励みになつたよ。」

俺達は笑つた。

虹音は、俺の特別な人だと確信した。でも、今は内緒にしておこう。

最終章 暖かな陽射し

「ねえ！これどこに置けば良い？」

吾末は、小さなダンボールを持って、階段の下をウロウロしていた。俺は下に降り、それを持ってやつた。

吾末と母さんは、俺と天子姉さんが暮らしていた家に引っ越しして來た。もちろん、衣麻莉さんも一緒に住む予定だ。

「うわ重つ！なんだよ、これ。」

俺は階段の一級目にそれを置いた。

「私のコレクションたち！」

吾末がイタズラっぽく笑つてから、言った。

「引越しの荷物はこの間全部運んだろ？」

俺は呆れてしまつた。吾末は、小さい頃から石をコレクションしている。俺も見せてもらつた事がある。エメラルドグリーンの透き通つた石なんかがあつて、一つ一つ見ると「おお！」と思うけど、それがじちゅじちゅと箱の中に入つていると、吾末には悪いが…ただの石だ。

「二人とも、着替えたの？」

リビングから、母さんの呼ぶ声がした。

「今着替えるとこ！」

二人でそう言つてから、俺達はハモつたことが可笑しくて笑つた。たくさんの出来事があつたおかげで（せいでの）、あの冬休みは終つてしまつた。俺はまだ十六年しか生きてないけど、こんなにたくさん仕事を経験できて、ある意味幸運なのかもしれない。不幸な事は、これから起ころる幸せで塗り潰していけば良い。俺はそう思う。

三学期も春休みもあつという間に過ぎ去り、俺達は一年生になつた。新学期、吾末と空音は、俺達と同じ高校に無事編入した。空音はそれまで、おじさんの妹の家に泊めてもらつていて、学校にも行っていたらしい。虹音も退院した。そして、俺達は何故かみんな同じク

ラスになってしまった。偶然なのか…？同じ名前が一組四人に、同じ顔が一組だと、先生達も大変だ。ご苦労様です…。

そして今日は、新学期始まって最初の土曜日。俺達は、みんなで天子姉さんの結婚式に行く事になつていて。

教会の中には、身内の人たちがたくさん来ていた。横長の木の椅子に吾末と座つていると、後ろから虹音と空音がやつて来て、俺達の後ろに座つた。

「ギリギリだな。」

振り返つて、俺は二人を交互に見ながら言った。吾末は目を真ん丸くしている。あまりに二人が似ているので、驚いているのだろう。

「香美が呼び出したんじゃないか。」

制服を着た虹音が、俺を非難するように見た。空音も、ネクタイはしないで、制服を着ていた。俺と吾末もそうしている。

「そういえばさ、なぜか俺達みんな同じクラスだよな今年。」

空音が吾末を見ながら言った。吾末は、まだ人見知りが治つていないのか、少し顔が赤くなつた。

「あれ、吾末つて妹じやなかつたつけ。」

虹音が言つた。

「一卵性双生児なんだよ。俺が父さんに似てて、吾末は母さんに似てるんだ。」

俺は吾末の肩を、励ますように軽く叩きながら言った。吾末は、決心したように一人を見て微笑んだ。

「二人は、そつくりだね。虹音と空音…だつけ。」

「そう。よろしくね。」

虹音が言つた。

俺達は外に出た。結婚式は、一通り終わつた。別の場所で行われる披露宴までは、まだ時間がある。

「素敵だつたね！僕、感動したよ。」

虹音が、はしゃぎながら言った。虹音の隣にいる吾末が、嬉しそうに笑っている。

「虹音、いい加減僕つていうのやめろよ。一応女なんだから。」
空音が、呆れたように笑いながら言った。

「なんだよ、一応つて！」

虹音がバシッと空音の背中を叩いた。俺達は、それが面白くて笑った。

と、駐車場の近くがざわめいた。何事かと、俺達はそつちを見た。

「え？！」「父さん？！」

俺に続いて、吾末が叫んだ。白のTシャツに、ジーパン姿の父さんが、確かにそこにいる。

その人は、駐車場から俺達の方に歩み寄ってきた。俺達の近くにいた母さんと姉さん、衣麻莉さんも、驚きで固まっていた。

「吾末、香美…心。」

父さんは、俺達三人の名前を、ゆっくりと呼んだ。吾末の体が、震えていた。しかし、俺はもう何も怖くなかった。虹音の言った言葉が、頭の中に刻まれている。

「父さん。」

俺は父さんに近づいて、言った。父さんは、昔と変わらずハンサムで、優しそうな目をしていた。

「三人とも、本当にすまなかつた。俺は、酷い事をしたんだ。お前達が怖がるもの、無理はない。でも、俺は…」

父さんは、寂しそうな顔をした。俺は、母さんと吾末を見て、それから父さんを見た。

「分つてるよ。本当は、俺達の事を大切に思つてくれてるんだる。」

父さんは、俺を見て、そして抱きしめてくれた。頭をクシャクシャと撫でてから、「ありがとう」と言った。吾末は、しばらく見ていたが、やがて泣きながら、父さんに飛びついた。吾末の頭も、クシヤつとなつた。

「心…。」

何時の間にか、母さんが俺達の所に来ていた。田には、涙が溢れている。

「本当に、すまなかつた。いろいろ、迷惑をかけて…。もう、お前達に会わない方がいいと思って、しばらく遠くに暮らしていただけど、でも、やつぱり俺には、心が必要なんだ。」

父さんは俺達を放して、母さんに近寄った。母さんは、少しの間を空けて、静かに言った。

「私にも、あなたが必要よ。これからもずっと。」

姉さんが、衣麻莉さんと顔を見合させて、笑っていた。俺達も、やつたーー!と叫びながら、笑つた。何時の間にか集まっていた人たちも、喜び合つていた。その中から、父さんの両親…おじいちゃんをおばあちゃんが出て来てた。お父さんの父親だけあって、とても格好の良く、おばあちゃんは美人で、俺達の自慢だ。

「蝶乃。おまえは大勢の人たちに迷惑をかけた。その時間は、もう取り戻せないものだ。」

おじいちゃんが、威厳ある低い声で言つた。

「はい。」

父さんは、しつかりとおじいちゃんの目を見た。

「だから、これからはおまえが責任を持つて、心さんや香美、吾末を幸せにしなさい。分つたな。」

「はい!」

父さんは嬉しそうに、はつきりと返事をした。おじいちゃんは、優しく微笑むと、おばあちゃんと一緒に、ゆっくりと駐車場に向かつていった。

「せついえば、香美もなんか言つてたよなあ。びょ・う・い・ん。で」

披露宴が行われるホテルに向かつ車の中で、突然空音が発言した。

「え、何を?」

空音の隣の吾末が、好奇心で目をキラキラさせながら言つた。空音

が、俺と、俺の隣に座っている虹音を見て、意味ありげに「ヤリ」と笑つた。

「あ！」

「今今まで忘れてた。」

俺は慌てふためいた。虹音も、よしやく思い出したらしい。が、きよとんとしている。

「たしか」「もっと虹音の側にいたい」とか、「俺、虹音がいないとだ」

「だあーっ！…までまでまでー！」

俺の顔は、たちまち熱くなつた。

「なんだよ？」

空音が意地悪く笑う。

「ああ～。」

吾末も同様に笑つた。

「ああ～とか言つなーおいつ虹音、フォローしろよ。」

俺は虹音を見た。

「ん～？」

虹音は悪戯っぽく笑うと、窓を開けた。風がボーボーと入ってくる。春の匂いがする。

「…つたぐ。」

俺は、コソコソと何か言つては、ヒッヒッヒッと笑う薄気味悪い二人を無視し、虹音の横顔を見た。通り過ぎていくサクラ並み樹と虹音が合さって、美しい景色となつていた。俺も、窓の外を見る。風に舞う花びらたちが、どこまでも青く澄み渡る空に舞いあがり、暖かな日差しが、それらを照らしていた。

最終章 暖かな陽射し（後書き）

これも大分前に書きました。初めて完結させた小説です。
最後までお読みいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5131d/>

何時でも何処でも衝動人と幻想人

2010年10月19日14時30分発行